

高等教育研究センター

Research Center for Higher Education

Newsletter

No.046

目次

2020.3

- 平成30年度学内版GP成果
藤田 あき美 講師
- 月見草とデータ
- お知らせ
- スタッフからひとこと



信州大学 | 高等教育研究センター
SHINSHU UNIVERSITY

平成30年度学内版GP成果報告 vol.4

前号に引き続き、平成30年度学内版GPに採択された取り組みをご紹介します。学内版GPの詳細は、高等教育研究センターのホームページにてご覧いただけます。

★ニュースレターのバックナンバーも、高等教育研究センターのホームページにてご覧いただけます。



<http://www.shinshu-u.ac.jp/institution/rche/approach/publication/cat2840/>

学術研究院工学系 藤田 あき美 講師

「グローバルリーダー育成教育活動Global Café : Let Girls Learn プロジェクト」



Global Caféとは？

Global Café は2013年12月に発足した学生主体の活動English Caféが、「なぜ英語を学ぶのか？」「グローバルとは何か？」を問い続けた末に進化を遂げたグローバルリーダー育成教育活動です。目標は、「英語」ではなく、グローバルリーダーとしてのコミュニケーション能力向上です。グローバルコミュニケーションとは、異文化理解、発信力、チームワークなどの要素も含まれます。Global Café の基本形態は、日本人学生と外国人留学生が、あらゆるグローバル課題を議論することです。しかし発足後4年目にして、多くの参加学生から、議論するだけではなくその結果を行動に移すべきではないか？という意見が挙がり、現実のグローバル問題解決に取り組むことになりました。問題解決の過程でグローバルリーダーに必要な要素を学んでいくのです。過去にジェンダー問題を議論してきたGlobal Caféは、「エチオピア農村部の女子は伝統的男女差別観と貧困により学校に行けない」という問題に着目し、平成30年度より学内GPの支援を受け、その解決に向けて活動を行っています。解決法は「農村部の女子に夢を与えるロールモデルを輩出すること」に



平成31年度Global Caféコアメンバー

決まり、農村部出身女子学生の信州大学工学部修士課程進学サポートを始めました。これが「Let Girls Learn」プロジェクトです。

Let Girls Learnとは？

Global Caféの議論を通して、エチオピア人留学生アシェさんから、エチオピアの農村部では就学年齢の多くの女子が学校に通うことができないことを学んだのがきっかけです。都市部と農村部の間には大きな経済格差があり、この格差が教育格差をうみ、ジェンダー格差をさらに助長しているようです。家族計画がなく、1世帯の子供数は平均10人であり男子が優遇されています。水道設備が整っていない農村部において、遠くの山まで毎日2-8時間かけて水を汲みに行くのは伝統的に女子の仕事です。食事の買い出しから用意、全ての家事は女子の仕事です。6歳から13歳までは義務教育ですが、行かなくても罰則がない故、女子に対しては学校よりも家事を優先させます。Tigray州の統計によると、2017年度、中学、高校、大学に入学した女子生徒数はそれぞれ1620、376、50名です。教育を受け続けることが困難であることがわかります。

エチオピアの女子に教育を



エチオピアの女子教育の実情を場で紹介するナフィさん（左端）がグローバルカフェのメンバー

信大工学部の学生らのグループ

信濃毎日新聞（2019.04.16掲載）

活動内容

Global Caféは毎週月曜日5限に60分間行なわれます。工学部生のみならず、長野県立大学、清泉女学院大学、長野高校、長野南高校などの学生が参加することもあります。平成31年度は10か国からの留学生12名と日本人学生8名がコアメンバーでした。毎週1国にスポットを当て、コアメンバーが、母国における、例えばジェンダー問題、解決に向けてのユニークな取り組みなどを発表し（15分）、発表者により提示された問題を小グループで議論（30分）、最後に全体で議論結果を共有します（15分）。また、問題解決に向けて様々な活動を行ってきました。例えば、エチオピア大使館訪問、Let Girls Learn @ Shinshu University Workshopを開催、神奈川大学、清泉女学院大学、パキスタンジンナ女子大学とのジョイントGlobal Café、Women's Leadership・グローバルリーダーシップに関する国内外学会での発表、フラワーデモやウーマンズマーチ参加などなど。エチオピア農村部のロールモデルになるべく女子学生も選出中です。そのために、毎週、エチオピアメケレ大学の女子学生とskypeで日本語会話レッスンを行なっています。渡航費や受験費などをファンドレイジングし、入学後の奨学金も取得しました。令和2年度入学に向けて動いているところです。



Global Caféでの
グループディスカッションの様子



地域の方々と連携を
とりフラワーデモ

Global Caféの教育効果

Global Caféの目的は、日本人学生・留学生が、インターナショナルチームとして、問題解決に向けて議論し動く過程で、「グローバルリーダー」として必要な要素を考え、取得することです。学内版GPの支援を受けた過去2年間の活動の中で様々な成長が見られました。学生の自己評価によると、グローバルコミュニケーションと異文化理解に関しては、——様々なアクセントがあり、異なる英語レベルの学生達とプレゼンや議論、活動をする過程で、効

率よく相手に意見を伝える方法、話を理解する方法を学ぶことができた、緊張しなくなった、意見を言えるようになった、異文化への恐怖心や偏見がなくなった、様々な視点から各国を見ることで、自国の問題も考えるようになった——などのフィードバックがありました。またリーダーシップとは、——他や違いを尊重すること、目的達成のために影響を与えること、虚偽がなくオープンであること、そして、謙遜心、学ぶ姿勢、勇気、信頼が必要だ——と言います。ジェンダーに関しては、——ごく身近にジェンダー問題がある、女子の心理に内在化されたジェンダー差別観が問題（男性の前で退く自分がいる）、自分の権利は自分で勝ちとるべき、教育が問題解決の鍵、女権は男性の解放と表裏一体、性暴力やLGBTQ問題に関心を持った——など、様々な気づきがありました。平成31年度にGlobal Caféメンバーであった日本人学生5名と中国・ベトナム人留学生それぞれ1名のGlobal Café参加事後のTOEICスコア平均上昇値は178点でした（事前事後のスコアがある学生のみが対象）。さらに6名の学生は信州大学のプログラム等を通じた海外経験があり、1名は令和2年度留学予定です。



令和2年度の計画

令和2年度は国連の持続可能な開発目標(SDGs) #10「Reduced Inequalities 人や国の不平等をなくそう」に視点を換え、Let Girls Learnの問題解決に向けて議論、比較を展開していきます（平成30-31年度の視点はそれぞれ#5「Gender Equality ジェンダー平等」と#4「Quality of Education 質の高い教育」でした）。世界では10人に1人が1日2ドル以下の生活をしている一方、最も豊かな8人が貧しい36億人分の資産を所有しています。貧富の差により命の格差が生まれ、ジェンダー格差や教育格差も貧富の差に比例します。エチオピアにおいても、都市部と農村部では女子の就学率が大きく異なります。令和2年度中に、エチオピア農村部女子のロールモデルになるべく女子学生を選出し、信州大学工学部修士課程進学につなげたいと思います。進学後はその学生の成長をインターネットで発信していきます。4月にはエチオピア人留学生アシェくんが帰国の際、ICT機器をエチオピアウェジラード高校に設置し、ジョイントGlobal Caféを可能にする予定です。また、地域でのアウトリーチも積極的にこなっていく予定です。

月見草とデータ



「また変なタイトルで気を惹こうとしている」と眉をひそめられている方も、いらっしやることでしょう。先日亡くなった野村克也氏の功績にあらためて接し、野村さんが監督時代に提唱した「ID野球」と、今日大学教育に求められている質の保証とその向上との接点を探ってみたいと考えました。信州大学を、野村さんの代名詞である「月見草」に擬するのが、適切かどうか分かりませんが、野にあり、ヒマワリほど燦燦と陽を浴びなくとも強く生きていく姿も、悪くないと思っただけです。

月見草にデータが良く似合う

野村さんの提唱した「ID野球」のIDは、Important Data の略とのことだそうで、教育に求められる質の保証にもデータや証拠は不可欠です。野村さんが亡くなった後の報道では、プロ野球選手としての実績もさることながら、監督・指導者としての業績が多く紹介されていました。その中心が「ID野球」です。データを重視して、選手の指導や戦略に役立てる野球といわれています。Thinking Baseball の一形態と考えられます。今でこそ、様々なデータを駆使して、野球をはじめとするスポーツに取り組むことは当然になりましたが、その当時は、「理詰め野球など面白くない」「数値で評価できるものが全てではない」「根性の方が大事だ」等々の『喝!』も、多々あったようです。もちろん、野村さんには、人間教育が重要との思いもあったようですが、それを支えたのも彼の高い観察力に基づくデータあるいは指導の根拠だったのではないのでしょうか。後に、野村再生工場と称された実績にも繋がっています。彼がこの「ID野球」を最初に導入したのは、当時万年BクラスのS球団でした。弱い球団、利用できる資源の少ない月見草のような球団にとって、データの集積と活用は、比較的成本をかけず高い効果を得るものだったと考えます。その結果は、皆さんご存知の通りです。

データ・根拠に基づく教育

教育においてもデータに基づく、根拠に基づく状況の把握とそれに応じた適切な対処が求められています。多くの分野で、「エビデンスベースト」(evidence based)という言葉が聞きます。よく耳にするものに、Evidence-Based Medicine (EBM) や Evidence-Based Policy Making (EBPM) があります。根拠に基づいて解決策や結論を導くことは、研究者には日常茶飯のごとで、本稿をお読みいただいている方々にとって、お釈迦様に法を説くようなものかもしれません。どこそこの話で思い出すような、その根拠となるデータ等の改ざんや遺失(破棄?)などはもってのほかであることは言うまでもありません。どこそこの話があまりにひどいので、「研究倫理」の方に話が逸れてしまいました。当センターの本務である教育に話を戻しましょう。



教育において、データ、根拠を正確におさえるべき所として、そのプロセスと成果がまず要になります。プロセスについては、比較的小さくてもいいと思いますが、成果となると10年先、20年先を見なくては分からないという面もあります。人間形成という点ではそうかもしれませんが、その最終目標に外挿しうる大学教育の達成目標を示し、それに到達しうる学習の機会や手段を用意し、その成果を確認して卒業・修了へと導く(学位を与える)ことが大学に求められる教育機能と考えてよいでしょう。このような要請は、21世紀を直前に控えた頃から声高になってきて⁽¹⁾、大学もその対応に追われてきました。大学が教育機関である以上、当然この要請に応える必要がありますが、一方で、大学らしい方法で応えることも重要です。その方法は、大学ごとに個性があってしかるべきです。とは言え、社会を納得させる適切な尺度で根拠を示し説明することも求められます。その中から、教育の「内部」質保証という考え方が出てきました。大学自らその教育の目標を設定し、自らの手で自らの基準でその質を保証するというものです。ただし、内部で完結するのではなく、それらの内容を社会に公表し、その正当性を判断していただくプロセスも欠かせません。これにより、大学の自律性を保ち、社会への責任を果たすことができるわけです。

教育の内部質保証と声高にいわなくても、教員個人、部局など様々なレベルで、個々の授業、教育課程や学習支援等々の適切さの確認をされてきていると思いますが、これらを大学として組織的にを行い、その根拠を示すことが求められています。文部科学省は本年1月、このような内容を含む「教学マネジメント指針」⁽²⁾を、公表しました。本学でも、独自の教育の内部質保証の概念を定め、その取組を始めています。来年度からそれぞれの授業の中で実施をお願いしている「授業アンケート」は、その中核となるものです。教育成果の検証を外部試験に委ねたり、様々なデータを駆使した指標を工夫したりして、質保証を担保する方法もありますが、本学では、個々の授業の成績が、そのまま学習成果の指標となっている根拠を示す一つの方法として授業アンケートが機能するよう検討してまいりました。もちろん、完全であるとはいえませんが、実際に取組んでみて、皆さんのご意見をお聞きしながら、社会からも信頼されるようにしていきたいと考えます。目立たなくても毅然と立つ月見草になれば良いと期待しています。

(高等教育研究センター 矢部 正之)

(1)文部科学省大学審議会：答申「平成12年度以降の高等教育の将来構想について」(1997)など。

(2)文部科学省中央教育審議会大学分科会：「教学マネジメント指針」(2020)。

本文は、https://www.mext.go.jp/content/20200206-mxt_daigakuc03-000004749_001r.pdfを参照。

お知らせ

FDカンファレンスについて

高等教育研究センターでは、毎年夏に、一泊二日のFD研修をご用意しております。分科会形式をとっており、先生方には興味のあるものを選択していただきます。

このFDカンファレンスでは、先生方にすぐにお役立ていただける教育手法をご提供しておりますが、それだけでなく、様々な学部で先生方と親睦を深めていただき、信州大学の教育の特徴を感じていただきたいと思います。これまでに参加された先生方からは、「他の学部の先生方と教育について深く話すことができた」「様々な学部の先生と知り合いになれた」といったコメントをいただいております。アンケートでの満足度も非常に高くなっています。ぜひこの機会をお見逃しなく、奮ってご参加ください。

【令和2年度FDカンファレンス】
日時：8月27日（木）～28日（金）
会場：ビレッジ安曇野
テーマ：「教育成果を見せる方法」

「教学マネジメント指針」について

文部科学省は、1月22日、「教学マネジメント指針」を公開しました。次がその主なポイントです。

- I 「三つの方針」を通じた学修目標の具体化
- II 授業科目・教育課程の編成・実施
- III 学修成果・教育成果の把握・可視化

IIIには次の説明がつけられています。

一人一人の学生が自らの学修成果を自覚し、エビデンスと共に説明できるようにするとともに、DPの見直しを含む

教育改善にもつなげてゆくため、複数の情報を組み合わせて多角的に学修成果・教育成果を把握・可視化 [下線は筆者]

学生による授業アンケートを授業の一部として実施していただき、アンケート実施の際には、この授業で学生ができるようになったことを一緒にふりかえっていただくようお願いしてきました。そのねらいの一つは、この下線部にあるように、学生が授業で得たこと、つまり学生の側から見た授業の教育成果を自分の口で言い表せるようにする、ということにあります。一層のご協力をお願いいたします。

IIには次の説明がつけられています。

明確な到達目標を有する個々の授業科目が学位プログラムを支える構造となるよう、体系的・組織的に教育課程を編成

この課題に対しては、教員が個人のレベルで応えるわけにはいきません。また、実は学部・部局全体で考えるにも難しいところがあるのではないのでしょうか。実際のところ、CPの難しさは、「全体で考えろと言われても」というところにあるのかも知れません。しかし、例えば「分野」くらいなら、教員は当然日常的に交流しており、また全部の授業を把握できる範囲ということになりましょう。IIには「分野」単位で応えていくのが現実的であろうと思われます。当センターでは、「分野」レベルのカリキュラム編成をご一緒に考えさせていただくコンサルテーションに今後注力してまいります。当センターを大学のリソースとして有効にお使いいただけましたら幸いです。
(高等教育研究センター 加藤 鉦三)

2020年度の調査について

各種調査へご協力いただき、ありがとうございます。2020年度は以下の調査を予定しております。

- ①「学生による授業アンケート」(各学期末・年2回)
- ②「教員による授業アンケート」(各学期末・年2回)

この2つのアンケートはほぼ同じ内容であり、教員と受講生がそれぞれの立場で授業を「ふりかえる」という作りになっています。上記のアンケートを通して、成績評価の妥当性や教員と学生との間に認識の齟齬の有無などを確認することができます。

- ③「学習に関するアンケート」(2020年11月)

この調査は、学生の学習場所、授業と授業外の学習時間及び各種活動時間を調査し、学生の学習行動を把握することを目的としています。

- ④「大学生調査」(2020年11月)

この調査は、4年次生を対象に実施するものです。調査の対象者は2017年に実施した「新入生調査」と同じとなるため、本学の学生が4年間でどのように成長したかを分析することができます。

ぜひともご協力を賜りますようお願い申し上げます。

スタッフからひとこと

文部科学省から「教学マネジメント指針」が公表されました。この指針からは、教育の質を保证するための取組みを着実に実行し、その結果を検証し、教育改善に活かし、それら一連のプロセスや成果の情報を公表することが強く求められることが読み取れます。教育の質保証の実質化に向けた取組みへのご理解・ご協力をお願いします。

(高等教育研究センター長 平野 吉直)